

「ここがトレセン学園
か。興奮してきたな」

愉快的な笛吹きさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

某芸人コント風。なお相手は犠牲になった模様

※タイトル、各話タイトル変更しました

目次

70

- 「ここがトレセン学園か。興奮してきたな」
1
- 「いよいよ夏合宿か。興奮してきたな」
8
- 「世の中一番興奮するのは因子継承の時
ですよ」
18
- 「ゆっくり温泉旅行か。興奮してきたな」
30
- 「ようやくエンディングか。寂しくなる
な」
43
- 「聖蹄祭か……いいだろう」
57
- 「明日は聖蹄祭か。興奮してきたな」

「ここがトレセン学園か。興奮してきたな」

「おーここがトレセン学園か。興奮してきたな。早速入つてみるか」

「ハウデイ！ いらつしやいませ、シャツチヨさん」

「いやテンション高いな。フィリピンパブじゃねえんだからもう少し声抑えてくんねえかな」

「オーウ！ うっかりしてました、ソーリーです。それで、ユーは一体誰でシヨウ？」

「ああ挨拶が遅れたな。今日からトレーナーとして働くことになった伊達つていうんだけど」

「ワーオ、シールド！ カツコいい名前デース」

「盾じゃねえよ！ 伊達だよ！ だ、て！ 何で最初から英語変換なんだよ……ええと、君は学園のウマ娘だよな。良かったら名前教えてくんねえかな」

「オウ……どうか海外に売り飛ばすのだけは勘弁してクダサイ」

「トレーナーだつてんだろ。第一印象最悪じゃねえか！ そもそもウマ娘拐うとか力が違い過ぎて無理だから」

「それもそうですネ。ワタシはタイキシヤトルです。トレーナーさんよろしく願ひし

「マースー！」

「ああよろしく。で、早速だけどちよつと理事長室まで案内してくれねえかな。こんだけ広いとちよつと迷っちゃいそうだし」

「なるほど、トレーナーさんは方向オンチですね？」

「結論早くねえかな？ 今日来たばかりだって言ってるんだろ。そのくらいわかれよ」

「わかりました！ なら離れずについて来て下さい。命に代えてもトレーナーさんを送り届けマースー！」

「重くない!? 理事長室行くのになんでそんな命掛けなんだよ。おかしいだろ」

「オウ…でもこういうのって人生で一度は言ってみたいセリフではないですか？」

「言ってみたいかなあ？ まあ年頃ならそういうのにも憧れるのかな。”安心して、君は俺が守るから”みたいな感じだろ？」

「ちよつと何言ってるかわかりませーん」

「何でわかんねえんだよ！ さっきの続きだろ？ こんな流れじゃなきや絶対言わねーよー！」

——移動中

「それで、トレーナーさんの担当するウマ娘は決まりましたか？」

「さつき来たばかりだつて何度も言つてんだろ？　伝わってねえなあ。そういうタイキシャトルはもうトレーナーがついてるのか？」

「まだついてないデース…あ、でもコンディショナーなら毎日付けてますヨ」

「でも」とこ全く関連性ねえなそれ。ナーしか合つてねえじゃねえか」

「それより、こうして出会えたのも何かの縁です。これからは“タイキ”と呼んで下さい。もしくはまあ…タル”、とかでも」

「何で俺の腹見て言うんだよ。まあ確かに今は樽みたいにぼっちゃりしてるけどな。これでも学生時代はラグビーをバリバリやってたんだぜ」

「ウフフツ、やっぱりトレーナーさんのジョークは最高デース」

「いや事実だよ！　ほんと失礼な奴だな…：まあいいや、今は建物のどの辺を歩いてんだ？　良い匂いがしてくるから食堂とかか？」

「そうですね。食堂みたいでーす」

「そうか。じゃあこの鍵のかかった部屋は？　倉庫か何かとか？」

「なるほど、確かに倉庫なのかもしれません」

「…：ちなみにあの角の先は何があるんだ？　職員室か？」

「その可能性がビッグでーす」

「お前全然把握してねえだろ？　さつきからオウム返ししてるだけじゃねえか！」

「うう、ソーリー…実はワタシも今日初めてトレセン学園に来たのデス」

「早く言えばよそれを！ よくそんなんで命に代えてもとか言えたな。信憑性ペラッペラじゃねえか」

「スミマセン…アイムソーリー髭ソーリーです」

「懐かし過ぎるだろ。令和でそれ言った奴に初めて遭遇したよ！ あーまあもういいよ。適当に歩いてたらそのうちたどり着けるだろ」

「イエース！ さすがトレーナーさんは話がわかりマース。どうか他のウマ娘に罪は無いのでワタシを担当にしてください」

「なんでちよつと生贄チックな売り込み方なんだよ…まあ一応候補には入れとくけど、やっぱ走りを見てみないことにはな。パツと見た感じマイラーっぽいけどどうなんだ？」

「うーん、マヨネーズはそんなに使わないデース」

「誰がマヨラーだったんだよ。マイラーだよマイラー！」

「ああマイルですね！ それなら芝もダートもどっちも得意デース」

「へえ両方とも走れるのか。そりや中々すげえ素質だな」

「あとはコンクリートもいけマース」

「コンクリート!? そんなコースどつかにあつたっけ？」

「小学校の校舎デース。鬼ごっこでは向かうところ敵なしでした」

「ただの学校の廊下じゃねえかよ。校内中走り回ったってマイルの距離になんねえだろそれ」

「そんなことはないです。かの宿敵カイゼルハインとの死闘は決着に7時間を要しましタ」

「誰だよ知らねえよ。まあとにかく一日中鬼ごっこしてたってことだろ。ただの問題児じゃねえか」

「それでも才能さえあれば活躍できるのがこの世の理なのデース」

「まあそうなんだけどさ！ ちょっと直球過ぎるだろ。感じ悪いぜ、それ」

「ウフフ、サンキューデース」

「いや褒めてねえよ」

——理事長室前

「ふう、ようやく着きましたネ。ここをくぐればもう後戻りはできません」

「いや普通に戻れるだろ。何雰囲気酔ってんだ」

「オーウそうでした。ちなみにトレーナーさんの目標って何ですか？」

「目標ね……まあ、まずは早いとこ担当ウマ娘を決めたいかな。で、最初は手堅く重賞を

取って」

「ワオ？ 手早く重症を負うのですか？」

「取るんだよ！ と、る！ 何でいきなり大怪我しなきゃなんねえんだよ……で、それが叶ったら次はGーだな。いつかこの手でダービーウマ娘を作りあげるのが夢でさ」

「オーウ……それはウマ娘が可哀想です。最下位から二番目だなんて」

「いやダービーだつつつてんだろ。誰が好き好んでブービーウマ娘作るんだよ」

「そうでしたか。なら安心しました。では寂しいですがここでお別れしまシヨウ。またコースに立ち寄ったときはワタシが走るところを見てくだサーイ！」

「ああ、必ず見に行くよ。ここまでありがとな」

——放課後

「ではこれよりトレセン学園の設備を案内していきますね。私に付いてきてください」

「よろしくお願ひします……ん？ あそこにいるのはタイキシヤトルか。何やってんだ廊下の真ん中で」

「トレーナーさん！ 待ってました。では早速ワタシの走りを見て下サイ！ ヒア・

ワイ・ゴー——」

「(っ)ら——！ 待ちなさ——い！」

「だからコンクリートはコースじゃねえって！　つてか追いかけたたづなさんもクソ早ええなおい。もうこうなったら二人まとめてスカウトしてみるか」

それから半年後、あるトレーナーが二人のウマ娘をデビューさせた。「最高の逸材を見つけた」と豪語したとおり、その後彼女たちは数々のG1レースを制したとか。

「いよいよ夏合宿か。興奮してきたな」

「いよいよ今日から夏合宿か。興奮してきたな。ほら、着いたぞタイキ、起きろ」

「ウウ…ン、着きましたカ。いよいよ収監されてしまうのデスね？」

「されねえよ。なんで護送車だと思っただよ。何も悪いことしてねえだろ」

「ノー…：…実はこないだ門限を破ってたづなさんに怒られてしまいました」

「別にそのくらいなら大したことねえだろ」

「なので門限を破ってもいいように、学園中の時計の針をずらしておいたのデース」

「そりや重罪だな！ やべえなこいつ。にしても、そもそも合宿で刑務所なんか来ねえだろ」

「そうですね。三年連続は流石にちよつと」

「二年連続で行ったのかよ！ どんな内容だったか凄え気になるな。まあいいや、とりあえず二人とも車から降りるぞ。まずは宿にチェックインしねえと」

「ドヤるマックイーンにデート？」

「言ってねえわ。流石に苦しいから無理に手え出すなよ」

「う、わかりました…：…まだまだ道のりは険しいデース」

「レース全く関係ない悩みだけだな」

——旅館内、ロビーにて

「オーウ、凄いですね。まさにワサビ」

「わびさびな。感想が薬味になってんじゃねえか。けど確かに高級な感じだよな。たづなさんに任せた形だけど、これ料金いくらくらいだったんだ？」

「はい。ご休憩が3000円、宿泊は一万円です」

「ご休憩じゃなくて日帰りな。言い方ラブホテルか。あとどうせ泊まるし日帰り料金とかいらぬよ」

「き、休憩だけじゃもの足りないんですか!？」

「何で顔赤らめてるんだよ。そりやもの足りないわ、トレーニングに来てんだから。とりあえず部屋に入ったら二人ともすぐに着替えてくれ」

「浴衣にですぬ」

「ジャージにだよ！ 合宿だつってんだろ。いいから早く着替えてこい」

——トレーニングその1 腹筋

「着替えてきましたトレーナーさん。それで、何から始めますか？」

「そうだな……とりあえず徐々に身体を慣らしていききたいし、まずは浜辺で腹筋いくか」
「まずはアヤベをクツキングですか？」

「違えよ。何さらつとカニバリズムしようとしてんだよ怖えな。腹筋だよ、腹筋」

「腹筋ですね。わかりました。フォームなんかはどういった感じですか？」

「まあ実際にやってみせた方が早いかな。まずは体育座りになってだな……タイキ、ちよつと足押さえてろ」

「こうですね？ トレーナーさん」

「ああそれそれ。で、このまま肩が地面に着くギリギリまで寝転がったら起き上がるのを繰り返すんだ」

「リズムカルにやっついていくんですね」

「そうそう。カウントしながらだと安定しやすいな。1、2で寝て、3、4で起き上がる」
「わかりました。じゃあ私が手拍子していきますね。はい、1、2、3、4 2、2、

3、4」

「ふっ……くうっ……！」

「ファイトデース、トレーナーさん！」

「……10、2、3、4！ はいお疲れ様でした。じゃあ休憩したらもう一セットいきましようか」

「いやいかねえよ！ 何で俺が最初から最後までやってんだよ」

「ワツツ？ でも今回の合宿でとことん追い込むってトレーナーさんが」

「お前らをだよ！ 俺を追い込んだって意味ねえだろうが。とりあえずまずはたづなさんにやってもらうから、タイキは足押さえててくれ」

「わかりました！ どうぞ、たづなさん」

「だから何でまた俺の足持つんだよ。たづなさんだつってんだろ」

——トレーニングその2 砂浜ダツシユ

「……よし、腹筋終わったな。じゃあちよつと水分補給してから砂浜ダツシユいくぞ。

タイキ、大丈夫か？」

「うう……お腹が痛くて起き上がれませーん」

「少し心配ですね……一応正露丸は用意してますが」

「腹痛違いじゃねえかなそれ。とりあえずちよつと安静にしといてくれ——で、ダツシユだけどいつもと同じやり方じやさすがにマンネリだしな。今日はこんなのを用意した」

「アングル……ですか？」

「ああ。こないだ理事長が貸してくれてな。これを足首につけて走ったらいつもよりト

レーニング効果が上がるらしい」

「面白そうですね、早速つけてみます。鎖はつけますか？」

「鎖はつけねえよ。どこの奴隷商人だよ」

「ワタシも早く試してみたいデース。けどしばらく起き上がれそうにありません……ト
レーナーさんつけて下さーい」

「仕方ねえな。じゃあ寝転んだままでいいから足を上げてくれ」

「わかりました……痛ッ……トレーナーさん、もう少し優しくお願いしマース」

「こら暴れんなって、我慢しろ。じっとしてたらすぐに済むからよ」

「お巡りさんこの人です」

「何でだよ！ いやわかっているけどな。傍から見りゃ倒れてるウマ娘に足枷はめようと
してるヤバイ奴に見えるんだろ？」

「はい。なのでいっそ鎖も取りつけてしまえば奴隷商人になりすませないことも」

「さつきから鎖好きだな。なりすましてどうすんだよ。更に表歩けなくなるわ。まあい
いや、そろそろ回復したか？」

「うう……まだお腹が痛みマース」

「まだ痛むのかよ。もしかしてどつか調子が悪いのか？」

「ノー、そんなことは……昨日はダイナーの後にアイスを沢山食べましたし、寝苦しくな

いようにおへそを全開にして寝ていました。食欲も睡眠も問題ありません」

「いや問題しかねえだろ。これでもかかってほど腹キンキンに冷やしまくってんじやねえかよ。正露丸ドンピシャだったわ」

——トレーニングその3 遠泳

「ファンタステイック！ たづなさんの正露丸で、元気いっぱい、完全復活デース！」
「テンション高えな……ええと筋トレ、瞬発力ときたから次はスタミナ強化か。たづなさんは秋に菊花賞だし、ここはがつつり鍛えねえとな」

「そうですね。とりあえず夕食はスッポンとにんくのフルコースで頼んでおきました」

「ギンギンになるやつじゃねえかよそれ。夜だけじゃなく昼間のスタミナも鍛えてくんねえかな」

「それで、今度は何するんですか？ トレーナーさん」

「ああ、あそこに離れ小島が見えるだろ？ とりあえずあそこまで泳いでもらうけど、万一事故があつたら大変だしな。ボートで後ろからついていくから、もし異変を感じたら大声で叫んでくれ」

「ワタシに構わず先に行け！ ですネ？」

「行かねえよ。普通に責任問題になるわ。で、もし声が出せなかった場合は腕を伸ばしてアピールするようにな」

「それは知ってマース！ 最後にグツジョブ！ って親指を立ててるんですよ」

「アイルビーバックスか。それ最後溶鉱炉に沈んでいくやつじゃねえかよ。縁起悪いな」

「泳ぎ方の指定なんかはありますか？」

「特に無いな。4泳法だったらどれでもいいぞ」

「ごますり、媚売り、相槌、愛想笑いですネ？」

「社会の泳ぎ方の話してるんじゃないやねえんだわ。もういいから早く海入れよ」

——1時間後

「ふう……やつと到着しましたね」

「流石に疲れましタ……肩に小つちやい冷蔵庫が乗ってマース」

「ボディビルの掛け声みてえな例えだな。まあそれはそうと、二人ともここまで良く頑張ってくれたからな。ちよつとしたサプライズを用意したぞ」

「サプライズ……もう20キほど追加で泳ぐんでしようか？」

「その茂みから銃を持った男たちが飛び出して来るのかも知れませーン」

「お前らのサブプライズの定義はどうなつてんだよ……そうじゃなくて、とりあえずポートの荷物を降ろしてみてくれ」

「トレーナーさん、これは？」

「見ての通りだ。二人が着替えてる間に宿がサービスで食材を提供してくれてな。許可は取つてあるし、今日の昼飯はここで食べるぞ！」

「ワーオ！ まさかのQBKでス！」

「BBQだろ。こんな場所で急にボールなんか来るかよ」

「オフコース、合つてますよ。急にバーベキューの空気の略デース」

「わかんねえよ。ええと、とりあえずさくつと火起こしするから、二人はその間に食材を開封していつてくれ」

「OK！ んーまずは肉ですね。ガーリックがたっぷりかかつて美味しそうデース。あとはニラにジンジャーにウナギに、ええとこれは……タートルですか？」

「スツポンだなこりや。てかよく見たら全部ギンギンになる食材ばっかじゃねえかよ。どうなつてんだ」

「多分私がスタミナをつけたいと言つたから気を利かしてくれたんだと思います。どうしましようっ？」

「まあ、せつかくの頂きものだし食べるしかねえだろ。土鍋も用意してくれてるみたい

だからいっちょ鍋にしてみるか。よし……S O r i、スッポン鍋のレシピを教えてください」

『今夜はお楽しみですね?』

「違うようるせえな。いいからさっさと教えろよ」

——数ヶ月後、理事長室にて

「天晴! まさかたづなとタイキシヤトルの二人ともが年度代表ウマ娘に選ばれるとは。やはり君は優秀なトレーナーだな」

「いや、それもこれもあの二人が頑張ってくれたおかげですよ。そういや今頃はマスコミからの取材を受けてる頃か。ちよつと見てみてもいいですか」

「了承! ならそのTVを使うといい。む、ちようどインタビューの最中のようだな」
『月刊トウインクルの乙名史です。この度は受賞おめでとうございます。まず、お二人から見てトレーナーさんはどんな方でしょうか? またデータを見ると夏合宿から更に強くなった印象を受けるのですが、どのようなトレーニングをされたのでしょうか?』

「ハイ! トレーナーさんはいいつも親切デース。合宿中もお腹が痛くて苦しんでいるワタシに、優しく足枷を取りつけてくれました」

「特に変わったトレナーニングはしていませんね。ですがそれまで出場したレースはマイルや中距離ばかりでしたので、菊花賞に向けて夜だけじゃなく昼間のスタミナも鍛えるようにと強く言われました」

『な、なるほど……で、では夏合宿で印象に残った思い出などはありますか？』

「ハイ！ 誰もいない島で皆でスッポン鍋を食べたことです！」

「それもトレナーナーさんからのサプライズだったんです。流石に食べた後はみんな（目が）ギンギンになっちゃいましたけど」

『あ、ありがとうございます。えっとその……ト、トレナーナーさんとの絆を深めるために色々工夫されているようですね。スケ……素晴らしいです』

「……………」

「……………」

「せ、説明！ ちょっと別室で話を聞かせてもらいたいのだが。今すぐにだ」

（あ、終わった……）

——その後、数時間に渡る大弁論を繰り広げたことにより、何とか誤解を解くことは成功した。

上機嫌でトレセン学園に帰って来た二人が見たのは仁王のような表情を浮かべたトレナーの姿だったとか。

「世の中一番興奮するのは因子継承の時ですよね」

ワタクシの名前はシラオキ。元ウマ娘で、天寿を全うした後は偉大なる三女神様の命により、トレセン学園にある女神像の管理をしています。

管理人であるワタクシの仕事は、ここを訪れた可愛い後輩たちにレースで勝つ力を授けること。でも残念ながら私一人では時間に限りがあり、誰でもというわけにはいきません。

前置きが長くなりました。そうこうするうちに今日もやって来たようです。才能ある、一人のウマ娘が。

「ここは……ワッツ!? 急に目の前が暗くなって、誰かが私の前を走り去っていきマース!？」

金色に光るとは実に幸運なウマ娘のようですね。さあ後を追いかけなさい。そして新たな力を手にするのです!

「ウーン……やっぱり止めときまショウ!」

「えっ? いやちよつと待って! 待って下さい!」

「オーウ! 突然現れてビックリしました。ユーは誰ですか?」

「ワタクシはシラオキと申します。それより、何故帰ろうとするのですか？」

「知らない人には付いていくなよって、トレーナーさんに言われましタ！」

「あーなるほど。もう余計なことを……いやでも、こうして金色に光る道が敷かれて、顔見知りじゃないかもしれないけど、学園の仲間が走っていったわけですよ？　ちよつと興味なくないですか？」

「UFOにデスカ？」

「いやUFOじゃないです。別に連れ去ったりとかしないですから。ちよつと新しい力が湧くだけで」

「やっぱりUFOですネ？」

「だからUFOじゃないんですって。人体改造で超能力とか芽生えたりしませんし。もういいからさっさと走っちゃってもらえますか？」

「ノー、今日はオフだから絶対走んじやねえぞってトレーナーさんに言われてマース」

「タイミング悪過ぎでしょトレーナーさん！　……すみません、ちよつと取り乱しました。別に走れないんなら小走りでもいいんです。何なら歩きでも匍匐前進でも構いませんから」

「まるで訪問セールスみたいな必死さデスね……シラオキはこの学園のトレーナーさんなのですか？」

「いえ、トレーナーではないです」

「ではティーチャーさんですか？」

「いや、それも違いますね」

「なら不審者に間違いありません！ 知らない人の言うことは聞くじゃねえぞってトレーナーさんに教わりました」

「つくづく余計ですね貴女のトレーナーさんは！ もう時間も無いのに……ではこうしましよ。距離適性を更に伸ばしてあげるのであつち行ってもらえますか？」

「微妙に失礼な言い方になった感じがしマース。でも距離適性はありがたいデース。いつも距離が近えよ、ってトレーナーさんに言われますノデ」

「いや人との距離の話じゃないので。そういうのは啓発本やカウンセリングとかで解決して下さい。そうではなく、あなたは短距離とマイルが得意なようですね。もしも短距離適性が上がれば更に強いスプリンターになれるですよ」

「ウーン、散水車にはなりたくはありません」

「スプリングクラーじゃなくてスプリンターです！ ならマイルの方を伸ばしてあげますから、何とか手を打ってもらえませんか？ 貴女なら今後の努力次第では海外G1も取れると思うので」

「そうですね……今日はひとまず話を持ち帰って前向きに検討してみマース。ではシー

ユー」

「もうそれ典型的な断り文句じゃないですかあ！ 困るんですよいい加減に早く行つてくれないと！ 4時になったら次の方来ちゃいますから！」

「ホスピタルみたいなシステムですネ……ウーンわかりました。なんだか可愛そうなので走つてあげマース」

「ありがとうございます。もしたらもう担当者は先に行つてるんで後を追いかけてもらえれば……はい、適性ももちろん。はい、ではよろしくお願いします。足元お気をつけてー」

「……………ふう、やっと行つてくれました。トレーナーさんが用心深いせいで無駄に時間を食つちやいましたね。全く腹だたい……つてもう4時なの！ まだ一人しか継承用の娘を設置できてないのに。もうこうなつたら——」

「——あら？ 急に辺りが真つ暗になりましたね。これは一体……きやつ」

まさかワタクシが代わりに走るようになるなんて……まあいいでしょう。ワタクシにしつかり付いてきなさい。そして新たな力を——ぐえっ!？」

「もうっ！ 校内を全力で走つちやいけませんっ」

「いえ、ここは校内ではなく……というか何であの体勢から捕まえられるんですか!？」

「校則違反を見つけたらそうなりますが」

「凄いですね校則違反。ワタクシも現役時代に風紀委員やればよかった」

「それより貴女は？ 見たところ学園関係者では無さそうですが」

「ああ申し遅れました。ワタクシはシラオキです」

「カニさんですか？」

「いやシオマネキではなくて。シラオキです」

「シラオキ……ああ確かマチカネフクキタルさんの占いの呪文に出てくる方ですよね？」

ふんにやかハッピー、般若がラッキー、ファッキューシラオキって」

「それはもう占いじゃなくて呪いの言葉では!? ワタクシ彼女に何かしましたっけ？」

「私に聞かれても……それよりここは一体どこなんでしょうか？」

「ここは継承の間です。かつてトウインクルシリーズを走り抜けたウマ娘が女神像に託した想いを力に変え、新たなウマ娘に授ける場所——」

「つまりリサイクルセンターみたいなものですね」

「いやまあそうなんですけど。空き缶やペットボトルみたいな扱いをされるのは何というかちよつと……」

「とにかく、私とその継承先に選ばれたということでしょうか？」

「ええ。ちなみにこの儀式は誰でもという訳ではありません。貴女は運が良かったのですよ」

「運ですか……どうせなら福引の温泉旅行の方に使ってほしかったんですが」

「そう言われましても……貴女だってレースで苦労した経験はあるでしょう？」

「ありませんよ？」

「またまた。もつとスピードがあれば——とか、あのタイミングで加速さえできていれば——とか思ったことがある筈ですよ？」

「ちよつと何言ってるかわかりません」

「何でわからないんですか！ もういいです。ワタクシの力で貴女の弱点を覗いてみま
すから。いきますよ」

【ウマソウルネーム】

トキノミノル

【各種ステータス】

スピード 1307

スタミナ 810

パワー 1196

根性 978

賢さ 1141

【現在取得しているスキル】

コンセントレーション

先手必勝

トツプランナー

お先に失礼っ！

脱出術

逃亡者

全身全霊

弧線のプロフェッサー

ハヤテ一文字

一陣の風

曲線のソムリエ

円弧のマエストロ

じゃじゃウマ娘

逃げコーナー ○

マイルコーナー ○

中距離コーナー ○

長距離コーナー ○

逃げ直線 ○

マイル直線 ○

中距離直線 ○

長距離直線 ○

リードキープ

地固め

尻尾上がり

逃げのコツ ◎

右回り ◎

左回り ◎

良バ場 ○

道悪 ○

春ウマ娘 ○

夏ウマ娘 ○

秋ウマ娘 ○

冬ウマ娘 ○

「……………」

「どうでしょうか？ 強いて言えば長距離の経験があまり無いのでその辺かなとは思ってますが」

「……ごめんなさい。全然弱点とか無かったです。むしろパーフェクト過ぎて引くレベルでした」

「でも儀式は続けるつもりなんですよね？」

「いえ、流石にこれ以上他のウマ娘との差が開くのはちよつと……申し訳ありませんが今回はキャンセルさせて下さい」

「ええ、構いませんよ。では私はこれで」

「はい、お気をつけて……うう、また無駄な時間を。もつと手際よくやっていきたいのに……」

「……その、良かったらですけど。何かお手伝いしましょうか？」

「えっ？ ほ、本当ですか？」

「はい。切羽詰まった表情を見ていたらどうにも他人事とは思えなくて……普段は学園秘書をしていますから、大抵のことには対応できると思いますよ」

「あ、ありがとうございます！ で、では権限を貸すので二人で手分けしてもらえますか？」

「わかりました。頑張ってみますね」

——数ヶ月後、フランスにて

『タイキシャトル、今一着でゴールイン！ 日本勢初となる、ジャック・ル・マロワの勝利を手にしました！』

「ビクトリー！ やりましたトレーナーさん！ 早速ダルマに目を描き入れましょう！」

「描かねえよ。選挙で当選したんじや無えんだから。でもほんと、見事な勝利だったな」「ウフフ、これもトレーナーさんと、力をくれたオシオキのおかげデース！」

「シラオキな。力くれて罰与えるとか意味わかんねえから。けどそれ、マジであった出来事なのか？」

「もう、信じて下サーイ！ 本当にあのとき白昼夢を見たのデース！」

「いや思いきり夢って言ってんじやねえかよ。たづなさんも見たっていうけど、女神像に行っても何も変わらなかつたってウマ娘の方が多いいみたいだし、あんま信用できねえなあ」

「いえ、全部本当ですよ。単に管理人さんが忙しいだけみたいです。まあ今後はそうではないでしょうけど」

「？」

——その後、トレセン学園の女神像で新たな力を手にする者が増えたとの報告があった。

体験した者の中には通常の金、銀ではなく、何故か緑色に光る道を見たという者もあり、遭遇した者はその後のレースで著しい活躍を見せたものの、その中身については皆口を揃えて「地獄を見た」と語るのみだったとか。

—— たづなさんによる因子継承 ——

「はー今日のレースもまた三位。こーも続いちや流石にネイチャさんの心も折れちゃいますよーって……何これ？ 突然真っ暗になって、緑色の光？ ……よくわかんないけど前を通り過ぎたさっきのウマ娘を追いかけたらしいのかな？ よし——」

「——ふふっ、どうしましたか？ 早く捕まえて下さい」

「ぜえっ……はあっ……うぷっ……いや、早すぎでしょ！ もう無理い〜」

「うーん、とりあえずスピードとパワーと根性が不足しているようですね。ではアップはこれくらいにして、早速基礎トレーニングに移りましょうか」

「えっ……？ あ、あれがアップって……じ、冗談DEATHよね？」

「いえ本当ですよ。ちなみに、ここは時間が流れないので私がいいと言うまで無限にト

レーニングができるんです。頑張ってくださいね」

「ひ、ひいいっ……んにゃあああ〜!!」

終

「ゆっくり温泉旅行か。興奮してきたな」

『トキノミノルだ！ トキノミノルが来た！ トキノミノル、今一着でゴールインー！ 日本の悲願であつたあの凱旋門賞のトロフィーを、ついに手にすることができましたー！』

「はっ……はあ……やりました！ トレーナーさんっ！」

「おめでとう！ 本当によくやってくれたな、たづなさん！」

「たづなさんコングラッチュレーションでーす!! 見て下さい。ネットでもお祝いのコメントが次々に寄せられてまーす！」

「そりやあそうだろ。こんな快挙滅多に見られねえもんな！」

「ハイ、まさか三つ子のパンダが産まれるなんテ！」

「いや何のニュース見てんだよ。パンダの話今いらねえだろ！」

「ソーリー、まだニュース記事が上がっていなかったノデ……あ、今速報がアップしましたネ『一着はトキノミノル。日本の伊達、ついに悲願の凱旋門賞を獲得』『日本、凱旋門賞を優勝。稀代の名バタたちを育てた伊達トレーナーの姿に迫る』『伊達トレーナー教え子とうまびよい疑惑？ 関係者にごく近いというT氏が話した真実とは』の三本デー

ス。んっがっんっんっ!」

「サザエさんの次週予告かよ。今どきじゃんけんぼんしか知らねえ奴の方が多いだろ……にしても、俺もすっかり有名人になっちゃったなあ。どこに行っても自分の記事やら画像を見かけるようになってよ」

「あとは交番の横くらいですネ」

「手配犯じやねえか。見かけたらむしろ駄目なやつだろそれ。そうじゃなくて——いや、今はいいか」

「トレーナーさん?」

「ああ悪い。けどこれで日本に帰ったら二人ともヒーロー確定だろ? きつと飛行機降りた瞬間に色んな人たちから取り囲まれるんだぜ」

「ポリス、レスキュー、ドクターにですネ」

「飛行機墜落してんじやねえか。誰が生き残りのヒーローになりてえんだよ。まあいいや、とにかくまずは控室に戻ってウイニングライブの準備しようぜ。疲れてるみたいだからどいけそうか? たづなさん」

「はい、この遠征のためにずっと頑張ってきましたから。あと20うまびよいはいけますよ」

「何だよその単位? ちょっとよくわかんねえけど、とりあえずうまびよい伝説20曲

分くらいは踊れるってことか？」

「ま、まあそんな感じですよ。ようやくトレーナーさんの夢も叶えられましたし、今日のライブは全力で頑張りますね」

「ウフフ！ たづなさんの本気ライブ楽しみデス。きつと残像が見えたり、手から怪光線が出てきたりするのデース！」

「本気の方向性ちよつと違ってねえかな？ まあ何にしろ、これで全部叶ったんだな

……俺の夢が」

「イエース!! なので今日はいっぱいいっぱいお祝いデース！ そして明日からは裏社会のドンを目指しまシヨウ！」

「誰が目指すか。何でいつもいつもそっちの方向に寄せていこうとすんだよ」

「それはトレーナーさんだからデース！」

「トレーナーさんだからですね」

「いや意味わかんねえよ。何で二人とも笑ってたんだ……もういいからとつと行こうぜ」

こうして、凱旋門賞は日本の初優勝により幕を閉じた。数時間後に行われたウイニングライブは歴代最高視聴率を上げ、中でも一位のウマ娘のダンスのキレは特に凄まじく、会場で見た者の中には何やら残像らしきものまで見えたとか。

——二ヶ月後——

「えっ？ お、温泉……ですか？」

「ああ。帰国からこつち、ようやくスケジュールも落ち着いて来たしな。ここらでちよつと一休みしたいと思つてんだけど、どうかな？」

「ベリーグーツド！ 温泉を掘るだなんて最高にエキサイティングです」

「いや掘るわけねえだろ。常識的に考えろよ」

「ソーリー、いくらなんでも手作業はインポッシブルですネ」

「そつちじゃねえよ。入浴だよ入浴。旅行に行こうつつてんだよ」

「まだ挙式もしていませんが？」

「相手すらまだ存在してねえわ。ほら、正月明けの商店街の福引で二人とも外れて残念そうにしてただろ？ だからあらためて手に入れたんだよ」

「商店街をホールドアップしたのですカ？」

「してねえよ普通に買ったに決まつてんだろ。何で温泉旅行でそんな危ない橋渡らなきゃなんねえんだよ。とりあえず二週間後に日取りを設定したけど、たづなさんの方は休み取れそうかな？」

「産休ですネ。もちろん大丈夫ですよ」

「過程ごっそり省いてねえかなそれ。一泊で産むとか鶏じゃねえんだから。タイキの方もそれで大丈夫か？」

「もちろんオフコースです！ 温泉旅行とつても楽しみになってきました！ お風呂にディナー、ピンポンに殺人事件、どれもわくわくしまーす」

「いや最後のはしねえだろ。それわくわくするのコンナン君ぐらいじゃねえか？」

「私も楽しみです。ところで場所は割と遠いんですか？」

「ああ。トレセン学園から大体150キロくらいかな。県外だし交通手段も考えねえと」

「そうですね……あ、犬ぞり式と駕籠式ならどちらが良いですか？」

「参勤交代か。何でお前らが選ぶ選択肢しかねえんだよ、目立ってしようがねえだろ。せつかく世間も落ち着いてきたってのに」

「イエース……この二ヶ月の間、どこに行ってもキャメルクラッチだらけでした」

「パパラッチな。キャメルクラッチってラーメンマンが殺人犯した技だろ。嫌だよどこ行ってもそんな光景見せられるとか」

「なら無難にレンタカーでしようか」

「まあそうだよな、二人ともまだまだまだ有名人士だ。悪いけどそつちはたづなさん用意頼めるか？」

「わかりました。じゃあフルスモークのバンでナンバープレートは隠しておくよう手配しますね」

「痕跡隠し過ぎだろそれ。麻薬の密輸みたいになっちゃってんじゃねえか。あと『本職の見せ所ですネー』みたいな返しいらねえからな、タイキ」

「オオウ……先に言われてやる気が絶不調になりました。今日はもうトレーニングを続けられそうにありません」

「トレーニングさつき終わったじゃねえかよ。話も済んだしました明日な」

——二週間後——

「よーし、ようやく着いたな。結構時間かかっちゃった」

「パトカーを撒くのに随分手間取ってしまいましたネ」

「いつやらかしたんだよそんなこと。ちゃんと安全運転で来てただろうが。とりあえず駐車場に止めるから、たづなさん先に降りて確認してもらっていいかな？」

「私がリードしたらいいんですね。前から入れますか？ それともバックでいきますか？」

「ああ、じゃあバックで」

「わかりました。じゃあ準備できたので来てください——あ、少し右ですね……そうそ

う、そこです。初めての場所ですからゆっくり慎重に……はい、ちゃんと奥まで納まりましたね。おめでとうございます♡」

「いや普通のバック駐車なんだけどな。何でそんな応援されてるんだ？」

「まあ予行演習も兼ねてということで」

「よくわかんねえな……とりあえず着いたからトランク開けるぞ」

「ドラッグを開けるのですか？」

「トランクだつってんだろ。いつまでそのネタ引つ張んだよ。いいから荷物持っていけ」

「——伊達御一行様ですね。このたびは当旅館へようこそお越し下さいました。何も無いところではありますが、海外遠征で溜め込んだ疲れを癒せるよう、どうぞゆっくりおくつろぎ下さい」

「ワオ！ 女将さんはワタシたちのことを知っているのですか？」

「ええ、いつも応援させてもらっていますよ。この間の凱旋門賞もTVで見えました。ラスト300で競り合いから抜け出したときは本当に痺れましたね」

「ウーン、それはリウマチやヘルニアの疑いがありますね」

「その痺れじゃねえだろ。ていうか妙に詳しいな」

「お話はこのくらいにして、早速お部屋にご案内します。二部屋の予約でよろしかったですね？」

「あ、それで大丈夫です」

「けど空き部屋が一つできてしまいマース」

「何で最初から相部屋前提なんだよ。二つ借りた意味全くねえだろう」

「ひと晩中声が漏れても大丈夫ですよ？」

「それはそれで普通に迷惑だろ。そもそもそんな遅くまで夜更ししないよ？ 寝不足のまま車運転したら大変なことになっちゃうだろ」

「そうですね。ガソリントタンクとボンネットを間違えて開けちゃいます」

「大したことねえだろそれ。たまにやるけどさ」

「こちらが本日のお部屋になります」

「オーウ、まさにジュンワフウな素晴らしいルームですネ！」

「確かなな。けどトイレ覗きこみながら言うセリフじゃねえだろ」

「ですがこつちは洋風デース、ジュンワフウは撤回ですネ」

「良いんだよそこは洋風で。そんな所まで無理に統一しなくたっていいよもう」

「ふふっ、皆さん賑やかでいらっしやいますね」

「ええ、多分夜はもつと賑やかになると思います」

「それはそれは。今日はお客様も少ないですのでご自由にお寛ぎ下さるといいですよ。それでは——」

「ありがとうございます——さて、ようやくゆつくりできそうだな。まずは」

「枕投げですか？」

「ゆつくりさせろつつつてんだろ話聞けよ」

「ではお布団を出しましょうか？」

「極端だわ。流石にまだ早過ぎんだろ」

「ならお布団を投げまシヨウ！」

「合体させんなよ最初より激しくなつてんじゃねえか！」

「だつたら何を投げればグツドなんですカ！ 匙ですカ!？」

「そもそも何も投げんじゃねえよ！ 何キレながら上手いこと言つてんだよお前は。とりあえずちよつとじつとしとけ」

「まあまあ。せつかく部屋に入ったのでまずは浴衣になりましょうか。着替えを行いますからタイキシヤトルさんは少し席を外して下さいね」

「それ普通俺の方に言わねえかな？ どのみち人前で着替えるのは恥ずかしいし隣の部屋行つてくるわ」

「わかりました。デハ着替えて少ししたら温泉に行きまシヨウ！」

「最初からそのつもりだったんだよ。無駄なやり取りだなこれ」

「ワンダフォー！ ついに待ちに待った温泉です！ 源さん垂れ流しデース！」

「誰だよそいつ汚えな。源泉掛け流しだろ」

「そうでした。では脱衣所なので一旦お別れデスね。また中で再会しまシヨウ」

「してたまるか。それやったら次は塀越しの再会になつちやうじゃねえかよ」

「入浴時間はどれくらいに設定しますか？」

「そうだな……いつもならずぐだけどサウナにも入りたいからなあ」

「男だらけのですか？」

「むしろそれ以外に誰が入ってくるんだよ。とりあえず30分にしといて、もし先に出た場合は——」

「迎えにいけばいいと」

「いや来なくていい、来なくていいから。そんな差し迫った状況じゃねえだろ」

「差し迫るのは社会的信用だけデース」

「わかってんなら絶対ちよつかい出してくんないよ。ちなみにフリじやねえからな」

「ふう……温泉にも入れたことだし、ようやくひと息ついたな」

「グレイトなお湯でしたネ。でもちよつとのぼせ上がってしまいました……」

「のぼせて、な。上がる要らねえから。とりあえず夕食までまだ時間があるけどどうするか」

「あ、私はちよつと理事長に事務連絡しますね。お二人はその間自由にしていて下さい」
「ああわかった。となると散歩は無理だからマッサージでもやつとくか。ちようど風呂上がりだしな」

「ワオ、いいんですか？ トレーナーさんのマッサージはいつも痛気持ちいいので大好きデース」

「そうか。まあ今日は時間もたつぷりあるしな。手加減抜きでやつてやるよ」

「私もあとでお願いしますね。それにしてもここは電波がいまいち……あ、繋がりましたね」

『もしもし、たづなか？ どうだ？ 温泉旅行は楽しんでおるか？』

『はい、とつても楽しんでますよ。今ちようど風呂を上がったばかりなんです、トレーナーさんがこれから手加減抜きの——をしてくれるみたいで』

『む、電波が悪いのか？ よく聞こえなかったな。伊達トレーナーが手加減抜きの何を
するって——』

「ヒ、ヒイヒイ！ ト、トレーナーさん！ ギブ、ギブアップです！ もうストップして下さい!!」

「何言ってるんだよ。まだ本番はこれからだろうが。今日は徹底的にやってやるから覚悟しろよ」

『い、今のはタイキシャトルの悲鳴か？ た、たづなよ……お主のトレーナーは一体何をしておるのだ?!』

『何——ただの——ですよ。トレーナーさんつては本当にテクニシャンで。私もタイキシャトルさんも何回も失神しそうになるくらいなんですよ』

『き、気絶するほどつて……き、驚愕！ お、お主はともかく、タイキシャトルはまだ未成年なのだぞ!』

『大丈夫ですよ。ちゃんと身体に負担がかからないように調節してくれていますから。あ、ほら。タイキシャトルさんも段々気持ち良さそうな声になってきました』

「オーイエース！ カムヒアーですトレーナーさん。もつとプレスして下さいー!」

「おつ、ようやく解れてきたか。ならもつとヒイヒイ言わせてやるからな」

『ふふ、トレーナーさんつたら張り切ってますね。私ももう待ちきれなくて。あ、よかつたら理事長も一度試してみてもどうですか？ もう抜け出せなくなっちゃいますから』

『な、何……だと!? そ、そんなことが許されるわけがないだろう!』

『大丈夫ですよ、頼んだら快く応じてもらえらると思ひますし』

『た、頼まれたら誰でも良いというのか!? な、何故なのだ、たづな! どうしてそんな男に——』

「よし、終わったから交代だ。こつちに来て横になつてくれ、たづなさん」

『あ、はい。今行きますね。そういうわけですから理事長、たつぷりフレッシュして明日帰つてこようと思ひます。では——』

『たづな! 止めろ! いくんじやない! もしもし! もしも——』

「ふう……お待たせしましたトレーナーさん。たつぷり気持ち良くして下さいね」

「ああ任しとけ。理事長何か言つてたか?」

「いいえ、特に何も。ああでもトレーナーさんがマッサージが上手いと伝えたら随分驚いていました」

「まあ見た目じゃイメージつきにくいだろうしな。驚くのも無理ねえか」

「そうかもしれないね。あ、良かったら今度理事長にもマッサージをお願いできませんか? 日頃から忙しくしているので疲れが溜まつていると思うんです」

「なるほどな。まあ日頃世話になつてることだし、考えとくか」

「ふふ、ありがとうございます。理事長も喜ぶと思ひますよ」

「ようやくエンディングか。寂しくなるな」

「お待たせしました。こちらが本日の夕食となります」

「おくようやくか。美味そうだな刺し身に天ぷら」

「腰ミノに手ブラ？」

「言つてねえよ。どこのグラビア写真集だよ」

「見た感じは和食が殆どのようですね。タイキシヤトルさんはお箸は使えますか？」

「ノー、ワタシはピストル派デース」

「いや得物の話をしてるんじゃないやねえから。箸で物掴めるかどうか聞いてんだよ」

「それは自信無いですネ……せいぜい飛んでるハエくらいしか掴めませーン」

「剣豪か何かか？ 逆にその方が凄えわ」

「そうなのですか？ ソーリー、なにぶんこういうワイセツ料理は初めてデ」

「会席料理だよ会席料理。まず名前から覚えろよ、何だワイセツ料理つて。どこにそんな要素があんだよ」

「裸に剥かれたベジタブルやフィッシュが一杯並んでマース」

「それ殆どの食材に該当するやつだろ。お前の好きなBBQやステーキも全部ワイセツ

料理扱いになっちゃうぜ？」

「ウーン話がワイザツになつてきましたネ。もうワイシャツの話は置いて早く食べまショウ！」

「お前が率先してややこしくしてんだよ。ワイシャツの話なんて全く出てこなかっただろー！ あーもういいや、さっさと乾杯して食べるか。その前にたづなさん、一言いいかな？」

「告白ですか？ わかりましたどうぞ」

「何でそんな期待に満ちた顔してんだよ。そういうことじゃなくて、乾杯前に一言挨拶してくれって言ってるんだよ」

「一言ワイセツしてくれ？」

「挨拶だつってんだろ。ただのセクハラだしまたワイセツの話に戻っちゃってんじゃねえかよー！ いい加減に食わせろよ」

「はく食った食った、流石に満腹だな」

「もう食べられませーん。腹ごなしに枕投げやプロレスごっこがしたいデース」

「もう駄目ですよ。枕投げなんかしたら階下に響いちゃいますから」

「何でプロレスごっこの方はスルーしたんだ？ まあでもそうだな、夜空も綺麗だし

ちよつと散歩にでも出てみるか？ 色々話したいこともあるしさ」

「話したいこと……こ、告白ですか？」

「いよいよ出頭を決めたんですネ？」

「違うつつつてんだろ。何二人揃って逃亡犯に仕立て上げようとしてんだ……ほんと、懲りねえよなお前ら」

「……トレーナーさん？」

「え？ ああ悪い悪い。ちよつとぼーつとしてたわ。んじやとつとと行くか」

「ハイ！ 夜の散歩楽しみデース！」

（今の表情、凱旋門賞で見かけたのと同じ……何かあるんですか？ トレーナーさん）

「フアンタステイック！ まさに満天の星空ですネ！」

「確かにすげえ輝きだな。これ見たら他のトレーナーたちが星の名前をチーム名に付けたがるのも納得だわ」

「星の名前……ヤスとかミキモトとかですか？」

「容疑者のホシじゃねえよ。多分一生輝けねえと思うわそれ」

「ウフフ、ソーリーです……でも本当にトレーナーさんと一緒にいるのは楽しいデース！ ！ これからもますますの御託、おべんちゃらをお願いしマース！」

「ご指導ご鞭撻な。それもうトレーナーって言わねえんじやねえかな……いや、あの意味間違つてねえのかもな」

「……? どうかしましたか、トレーナーさん?」

「いや、言いたいことが色々あり過ぎてな。そうだな……初めての担当だったけど、この三年間本当に楽しかった。夢だったダービー優勝だけじゃなく、二人のおかげで数々のG1レースを取れたこと、本当に感謝してる」

「ウフフ、もつと感謝するといいいデース」

「十分に勝てるレースでしたので、そんなに畏まらなくても大丈夫ですよ」

「謙虚さの欠片も無えコメントだな……まあでも、そんな二人をずつと見てきたからこそわかるんだよ。もう俺の力はお前らには必要無いつて。だからよ——今年度で、このチームは解散する」

「解散……ならば次は選挙で決めるんですね。対抗バは誰でしょうか?」

「厳しいバトルが予想されますネ。ドブ板センジュツ、タガクのケンキン、ヒシヨがヤリマシタの出番デス」

「汚職政治家のやり方じゃねえかそれ。そもそも選挙とかしねえから。解散だけな、契約も延長しない」

「そ、そんな……」

「ワッツ!? そ、それは認められませーん! 来年も、そのまた来年も、ワタシのトレーナーさんは伊達トレーナーさんだけデース!」

「タイキ……悪いけどそれは無理なんだ。黙ってたけど、俺は三月いっぱいでの学園から去る」

「十年後の三月ですか。なら安心しましタ」

「サッカー選手の夢ノートか? そんな先の話なわけねえだろ……ジャック・ル・マロワの時だったか。たまたま向こうのトレセン学園の関係者から声を掛けられてさ、日本よりもずっと多くのことを学べるって言われて悩んでた時期に、偶然こんな記事をネットで目にしてよ」

「……パンダのニュースが何か関係あるのですか?」

「そつちじゃねえよ。その二つ下な。『快進撃の伊達トレーナー、勝利の秘訣は単なるウマ頼み?』ってやつだ」

「何ですか……これは!」

「単なるゴシップ記事だけど、まあ何となく想像できるだろ? 要は俺の実績は、単にお

前らの才能が凄かったから、って内容だ。もちろん見たときはすげえムカついたけどよ……完全に否定できるほどお前らに特別なことをしてやれたとはどうしても思えなくてさ。そんな自分自身にもまた腹が立ってたんだわ」

「……で、でも所詮はゴシップですよ？ こないだのうまぴよい疑惑の件は別としても、嘘や推測だらけの記事をそこまで気にしなくても」

「そこはうまぴよいの方を無視すべきじゃねえかなあ？ まあとにかく、気にしちまうのは俺がトレーナーとしてまだまだ未熟って証拠だ。だからフランスで勉強し直して、今度こそお前らを全力で支えられるようになりてえんだよ」

「トレーナーさん……」

「そういうわけで、ここらで一旦お開きにしようぜ。何年かかるかはわかんねえけど、いつかまたお前らとチームを組めるように——」

「ノー！！ そんなのは嫌デース！ ワタシは……ワタシはトレーナーさんとずっと一緒にいたいデース！！」

「わかんねえ奴だな……話聞いてただろ？ 別にもう会えなくなるわけじゃねえんだから、お前らの為にもこれがベストなんだよ！」

「わかっていないのはトレーナーさんの方デース！！ ワタシが初めてトレセン学園に来たあの日……本当はベリーベリー不安でした！ パパもママもフレンドも誰もいない。そんな所でやっていけるのかって泣きそうなときに、トレーナーさんに出会ったんデース。大きくて、ブロンドヘアで……ほんのちよつとだけパパに似たふいんきだったから思わず声をかけたんデース」

「雰囲気な、確かに間違えやすいけどさ……そうなのか」

「そうデース……でも、声をかけてからはもう寂しくなくなりました。トレーナーさんはいつも面白おかしくリアクションしてくれマスし、たづなさんは時々怖いデスが、いつも優しくしてくれるからデース。二人がいてくれたから……まるでパパと、ママみたいに……いつも見守っていてくれたから……ワタシはここまで……ヒック……成長できましター！」

「タイキシヤトルさん……」

「だから……トレーナーさん、辞めるなんて言わないで……ヒック……下サーイ。そんなの寂しくて……ヒック、夜しか眠れませーん！」

「普通じゃねえかよそれ。けどまあ……ありがとな、タイキ。でも俺は——」

「……その前に、私からもいいですか？ トレーナーさん」

「何だよ？ たづなさん」

「一つ言い忘れていたことがあります——あの凱旋門賞のとき、私は決して良いコンディションじゃありませんでした。そのうえ芝の違いやラビットの存在など、環境的にもずっと不利な状況……そんな中、私はどうやって競り合いから抜け出せたと思いますか？」

「そりやまあ……体力や末脚を残してたとかだろ？」

「違います——あるとき、競り合っていたウマ娘たちは誰もかれもが叫び合っていました。『負けねえ——』とか『勝負だ!』みたいな言葉を大音量で私に浴びせてきて……だから、私も負けじと声を上げてみたくです」

「……まさか」

「ええ、につこり笑いながら言いました。『Je ne sais pas de qui tu parles 《ちよつと何言ってるかわかりません》』って」

「マジ……か。あの局面でか?」

「面白かったですよ。あの場の全員がぼかんとした顔になって。そうして生まれた一瞬の隙を突いて、競り合いを抜け出したというわけです」

「ア、アメージング……そんな駆け引きがあったんですね」

「ええ。ですがもちろん、こんなのは一回こつきりしか通用しません。競り合った向こうのウマ娘たちがたまたまりアクションの激しい性格だったのもあるでしょう……。だとしても、あのととき私が勝てたのは、間違いなくお二人のやり取りを間近で見続けていたからなんですよ」

「……………」

「そうだったんですネ……フツ、やつぱりこのチームは最高デース」

「報告は以上です。ちなみに、学園の秘書としての立場から言わせてもらえば、ゴシップ

記事とか自己評価とかどうでもいいと思っっています。大切なのはトレーナーさんの育てた愛バたちがどう思っているか。だから、胸を張って下さいトレーナーさん。私は貴方を——」

「イエース、ワタシもユーを——」

「世界一のトレーナーさんだと思っっていますから」

「……………反応がありませんね」

「全米が引くほどのコメントをしたと思っただのデスが」

「…………いや引いたら駄目だろ。せっかくグツと来るようなことを言ってくれたのによ」

「それなら良かったデス。でもお気持ち表明だけではまだまだ足りませーん。確かな形になるものをお出しできればここで手打ちにしましヨウ」

「完全にヤクザの脅し方じゃねえか……はあ、せっかく格好付けて別れるつもりだったのによ。そんなこと言われたら揺れちゃうだろ」

「お腹がですか？」

「心がだよ。腹はいつも揺れてんだようるせえな！　というか今のやり取りでようやくわかった。お前らを他のトレーナーに預けんのは無理だなこれ。ふざけ過ぎて最後には付き合いきれなくなるのが目に浮かぶわ」

「ええそうですよ。だって私たちはトレナーさん専用のウマ娘なんですから」

「ハイ！ もうトレナーさん抜きではやっていけないボディになってしまいましたタ」

「また人聞きの悪いコメントだな……………まあけど、お前らの話を聞いて、俺の頑張りも全くの無駄じゃないってことがよくわかったよ……………ありがとな」

「ウフフ、雨降って爺が田んぼを見に行くとはこの事ですネ」

「雨降って地固まるだろ。状況悪化してんじやねえかそれ。ま……………とりあえず話はまともだったことだし、さっきの話はキャンセルだな」

「でも、トレナーさんはフランスに行きたいんですよね？ ですが私たちもトレナーさんの側を離れたくないですし……………だったら、方法は一つしかありません」

「ハイ！ トレーナーさんを二人に増やしマース」

「アメーバかよ俺は。それできるんならこの流れ全然要らなかつただろうが！」

——三月末日——

「快晴っ！ まさに三人の門出を祝福するような、良い天気だな」

「最後までばたばたさせてしまつてすみません理事長。おまけにあいつらの留学の手続きまで世話になつちやつて」

「結構！ 君には何度も変な誤解をしてしまつたからな。せめてこれくらいの事はさせ

てほしい。また肩を揉んでもらえる日を楽しみにしておるぞ！」

「理事長のこと、よろしくお願ひしますね。樫本、秘書、代理」

「あ、はい……ですが担当者の変更手続きの理由、本当に間違っていないんでしょうか？」

その、育休と書いてあるのですが……」

「ええ、そのうちそうなると思いますから。大丈夫ですよ、昔から約束事はきっちりとする性格なので」

「そ、そうですか。わかりました。ならこれで申請しておきますね。健闘を祈ります……」

「——そろそろ時間だな。見送りは済ませたか？ タイキ」

「ハイ。海外に売り飛ばされることになりましタ、と言ったら皆涙を流してくれましタ」

「涙を俺の信用と引き換えにすんじやねえよ。何してくれてんだ」

「ウフフツ、流石にそれはジョークです。ダイジョーブ、少し寂しくはありますが、三年前と違って泣きそうになることはありません」

「ならいいけどな。とりあえずは新しい環境に早く馴染まねえと。仏語の勉強は順調か？」

「イエース、ですがこのブックは漢字だらけでわかりにくいのでース。マンガキツサ、ウドン、パクパク……」

「遇茶喫茶【ぐうさきつさ】、優曇華【うどんげ】、魂魄【こんぱく】な。それ仏語じゃないか。お前さん、よく勉強したな。それ仏教用語だろが」

「オーウ、うっかりしてました。仕方ありません。こうなれば飛行機の中でみっちりトレーニングさんに教えてもらいます」

「あ、なら私もお願いしますね。とりあえず『tu voudrais devenir ma femme ?』（僕の妻になってくれないか？）の日本語訳を今すぐ教えてほしいのですが」

「聞こえていますか？ トレーナーさん」

「お前らなあ……これ以上俺に負担掛けんじゃねえよ！ もういいよ！」

——こうして、日本でのレースを卒業した三人はフランスに渡り、現地のトレセン学園に所属することとなった。ひっきり無しにコミュニケーションを取り続けるという斬新な育成方法によってめきめきと頭角を表した二人のウマ娘は、後に数々の海外G1レースの覇者となったとか。

——その後——

「行ってしまったな……何とも優秀なトレーナーだったんだが仕方が無い。代替りの者は手配できておるな？」

「はい。フランスのトレセン学園より交換留学の形で一人派遣されるようです。少々変わり者とのことですが……」

「それでも腕は確かなのだろうか？　なら問題はあるまい。再びこの学園に新しい風が吹いてくれることを期待しようっ！」

——四月上旬——

「ようやく辿り着いたようだな……なあそこの君」

「私……ですか？　何でしょうか……？」

「ここはトレセン学園の建物で間違いないかな？　そば屋ではなくて」

「ええ……合ってます。というより……普通はそば屋と間違えたりしないと思いますが……」

「なるほど……いいだろう。では案内してくれ、この学園を支配するトップのところへ。理事長室にだ！」

「回りくどい……最初から『理事長室に行きたい』でいいのではないのでしょうか？　案内はいいですが……アナタは一体誰なんですか？」

「人に名前を尋ねる時はまず自分からだ……違うかな？」

「すごく面倒くさい人ですね……私は……マンハッタンカフェ……といえます」

「パン食ったら屁か。確かに、自然の摂理だな」

「蹴り飛ばしますよ……マンハツタンカフェです」

「マンハツタンカフェ……良い名だな。どこか珈琲を思い出させてくれる」

「カフェとついでるんですから当然では？ それで……アナタは？」

「ああ。俺の名は富澤。今日からここに配属することになったトレーナーだ。ところで

……まだ名前を名乗って無い奴が、この場にいるんじゃないかな？」

「つ!? まさかアナタは……見えるのですか？」

「ああ、ぼつちり見えている……その影でタバコを吸っている警備員の姿がな！」

「……そつちでしたか。校内は全面禁煙ですし……とりあえず注意する必要がありますね」

ね」

「そうだな……だが直接注意するのは怖い。だからその君、ちよつと警備員の前で音

を立ててびつくりさせてくれないか？」

「やっぱり……見えてるじゃないですか！」

「見えてる見えてるって、ちよつと何言ってるのかわからないな」

「何でわからないんですか！ もう……理事長室でしたね……とりあえず私に付いてき

て下さい……！」

完

「聖蹄祭か……いいだろう」

「聖蹄祭……だと？」

「はい……独特な名前ですが、要は一般の学校でいう文化祭のようなものです」

「ほう、一般市民が多く集まるその日を狙って爆弾を仕掛けようというわけか。考えたものだな、カフェ」

「想像すらしていませんが……人を勝手にテロリストに仕立て上げないでもらえますか？」

「ははっ！ 世間の浮かれた連中に、この世の不条理を教えてやると言ったのは誰だったのか」

「少なくとも私ではないですね。もういいので先に進みます……聖蹄祭は各人、何かしらのスタッフになることが義務付けられています。出し物の主催者になっても、裏方としてバックアップに回っても構いません」

「なるほど……奴隷のようにこき使われるか、競争に勝って栄光を掴むかの二択というわけか」

「文化祭でなぜそこまで悲壮に思うのか理解に苦しみますが……まあそういうことで

す」

「いいだろう……それで、カフェはどちらを選ぶ気だ？ 奴隷か？ それとも栄光か？」

「また極端な……でもそうですね。今年は主催者の方をやってみたいです」

「多くの者が成功を夢見ては破れ、最後は何も残らない。そんなリスクを背負う価値が果たしてあるとでも？」

「どっちなんですか！ ついさつきまで裏方を奴隷呼ばわりしてましたよね？」

「ちよつと何言ってるかわからないな」

「何でわからないんですか！ もう……とにかく、今回私がやりたいのは喫茶店です」

「喫茶店か。かなり人目につくが大丈夫なのか？」

「大丈夫です。人と話すこと自体は好きですから」

「わかった、ではカフェは店員役だな。俺は厨房からライフルでバックアップしよう」

「その殺りたいではなくて。喫茶店をオープンしたいという意味です」

「ス〇バと肩を並べるほどのか」

「そこまで壮大ではないです……一日だけのイベントなんですから」

「はっ……誰もが大人になるにつれ、できない理由を探そうとする。昔はあんなにやんちゃだったのに、随分小さいことを言う奴になり下がっちゃったもんだな」

「知り合ってまだ一年半にもなりません……本当にもうそろそろいいですか？」

「あ、はい」

「当日は私とトレーナーさん、そして不安しかなんですがアグネスタキオンさんが協力してくれることになったので、三人で店を回すことになります」

「ふむ。なら取り分は俺が6、カフェが3、タキオン1が妥当か」

「全然妥当じゃないです……そもそも当日の売上は全額生徒会の預かりですよ」

「つまりカフェは雇われ店長か。ははっ！ とんだ操り人形つてわけだ！」

「ああああもうっ！ やる気が無いんだったら帰って下さい！」

「やる気はある。ただ空回りしているだけでな！」

「自信満々に言わないで下さい！ で、こんな調子では確実に失敗しますので今からタキオンさんも交えてリハーサルをします……いいですか？」

「いいだろう……ではもう一度最初から説明してもらえるか——あつ、待つて蹴らないで」

——30分後

「それではこの空き教室を借りてリハーサルを行います……私がお客さん役を演じるので、トレーナーさんは店員、タキオンさんは厨房スタッフをお願いします」

「いいだろう」

「任せたまえ。厨房と言ったが、実際に作って持っていけばいいのかい？ カフェ」

「ええ、何種類かそこに作り置きしているものがあるのでそれを使って下さい……絶対
に自作しないように」

「フリだろうか？」

「フリだねえ」

「断固として違いますから……とりあえず始めていきますね——あの、ここはカフェ
でしょうか？」

「いや、カフェは君だが？」

「文脈で判断して下さい。喫茶店かと聞いているんです」

「なるほど。わかった」

「もう一度いきますよ……あと店員なので敬語でお願いしますね」

「Entendu（畏まりました）」

「フランス語ではなく日本語で——すみません、ここは喫茶店ですか？」

「あ、そうです。ようこそカフェ『死者のはらわた』へ」

「喫茶店にあるまじき店名をつけないでください——あの、コーヒーを飲みに来たんで
すが」

「頭皮を揉みにきたんですか？」

「マツサージチエアですか私は！ お客です、お客」

「あ、お客さんですね。すぐにご案内いたします。お席はカウンターとテーブルどちらにしますか？」

「ではカウンターを」

「わかりました。じゃあ僕は休憩にいきますんで。お客さんがきたら笑顔で対応して下さい」

「受付カウンターは席じゃないです。何しれつと店番させようとしてるんですか……テーブル席で」

「テーブル席ですね。かしこまりました。禁煙喫煙はどちらにしますか？」

「もちろん禁煙で。というか学園内はタバコは禁止ですよ」

「いえ大麻の方ですが」

「なおさら禁止です！ なにいきなり非合法なカフェにしようとしてるんですか！」

「海外だと実際に存在しているので——ああそういうえば、本番では飾り付けなんかもあるのか？」

「あ、そうですね。できればそれを踏まえた案内なんかもしていただければ……」

「いいだろう——それではお席にご案内します。あ、そちらは店長が集めているパカぶちです。ええ、可愛いですよ。おまけに夜な夜な動き回ったり髪が伸びたりするそ

うで」

「人のコレクションを呪われたグッズにしないでください……本当にたまにだけです
ら」

「十分呪われてると思うがねえ」

「それではこちらのお席になります。椅子やテーブルはご自由にお使い下さい」

「普通は自由に使えるものだと思います」

「貴重品などは足元にあるカゴをお使い下さい」

「ああ、そういう気遣いはありますね」

「後でスタツフがこっそり回収させていただきます」

「普通に窃盗ですよね!? 一番やったらダメなやつでしょう!」

「でも海外じゃチップとかももらうじゃないですか」

「チップどころかメインを持っていくこうとしてるじゃないですか……もういいから次に
進んで下さい」

「ご注文はアイスコーヒーでよろしかったですね?」

「何でもう確定してるんですか。違います」

「でもお連れの方はそれでいいと」

「一般的に見えないものはスルーしてください——何でもこういふときだけほのめかして

くるんですか?」

「ではこちらがメニユーになります。おすすめは坂道ダツシユにタイヤ引きですかね」

「かね、じゃないです。それ私の練習メニユーですよ。ではなくて、お品書きを出してください」

「すみません、ではこちらで」

「なんで胸元から出してくるんですか。秀吉じゃあるまいし」

「うん? 秀吉?」

「あ、すみません……トレーナーさんはずっと海外育ちでしたよね。その、戦国時代の有名な大名で」

「信長の草履を身体で温めたあの秀吉?」

「知ってるじゃないですか! 何だったんですかさっきのフリは! まったくもう——」

お品書き

・ ホットコーヒー?

・ アイスコーヒー?

・ エスプレッソ?

・ カプチーノ?

・毛力

・抹茶色に輝くカフェオレ

・紅茶

「……このクエスチョンマークは何ですか？ タキオンさん」

「即座に決めつけるのはどうかと思うよカフェ、まあ合ってるがね。いやなに、日々の研究の成果を披露するには良い機会だと思ってるね。こうして疑問系にしてあげば商品詐欺にはならないって寸法さ」

「詐欺以外の罪には問われなくても？ おまけに品揃えまで勝手に追加して……カフェオレの方は大体想像つきますが、紅茶には一体何を仕込むつもりですか？」

「何を言うんだい。私の脳を支える神聖な飲み物に泥を塗るような真似などできるわけがないだろう？」

「コーヒーならいいとでも？」

「泥水と呼ぶ国もあるみたいだからねえ。まあそれ以前に、単に色が濃いから仕込みやすいということもあるんだが」

「……まあいいです。どうせ当日は私がキッチンに立ちますから。タキオンさんには指一本触れさせません」

「ふふ、私を守ってくれるなんて可愛いじゃないか」

「守るのはコーヒーとお客さんです……とりあえずモカを。字が少し間違っているようですが」

「いえ合ってますよ。こちらスタッフが開発した強力な毛生え薬でして」

「薬局で売って下さい薬局で！ 客層がハ……少林寺みたいになるじゃないですか！

——ならもうホットコーヒーで。砂糖もミルクも薬も抜きでお願いします」

「ではホットコーヒーがクロで、間違いないですね？」

「刑事ドラマですか？ ちゃんとブラツクと言つて下さい」

「ブラツクがお一つですね。ご注文は以上でしようか？」

「そうですね……あ、そういうばこは持ち帰りも可能ですか？」

「僕をですか？」

「コーヒーに決まってるでしょう！ いちいちアングラな方向に持つていけないでくだ

やう」

「ああコーヒーの話だったんですね。ベイルアウトで」

「テイクアウトですテイクアウト。コーヒーをどこに脱出させるつもりですか。アイス

コーヒーを一つお願いします」

「アイスコーヒーですね。かしこまりました。サイズの方がS、M、CLUB——もと

い、Lがございませうが」

「絶対わざとですよね？ そんな言い間違えしないでしよう普通……ならSで」

「Sサイズですね。こちらサービスマンでトッピングが付きました。ソーセージ、ちくわ、シーチキンの中からお一つ選んで下さい」

「選ばないです……何でそのチョイスなんですか」

「やっぱり……サラミの方が？」

「そこじゃないです！ コーヒーに盛り付けるんですよ？ なんでラインナップが肉や魚ばかりなんですか」

「ウインナーが入ってるならシーチキンもありかなと」

「ウインナーコーヒーはそういう意味じゃありません！ もういいからお会計に進んで下さい」

「わかりました。ではホットコーヒーとアイスコーヒーのSサイズをお持ち帰りです。300円になります」

「300円ですね。なら100円三枚からで——すみません。50円が一枚混ざってますね」

「大丈夫ですよ。お釣りは出ませんが」

「250円じゃないですか。なんで最初から言わないんですか」

「ところでスタンプカードはお作りになりますか？」

「スタンブカード……ですか？」

「はい。合計3杯で貯まるようになってまして。どうしますか？」

「まあそれなら……因みに貯まったら何かもらえるんですか？」

「はい、こちら毛力をプレゼントします」

「だからハゲしか来なくなるって言ってるじゃないですか！ もういいです！」

——その後、根気よくトレーナーたちに指導したことにより接客は改善し、どうにか聖蹄祭は終了した。

翌月、マンハッタンカフェは悪天候のなか見事菊花賞に勝利する。忍耐を強いられるレース展開を制することができた理由をインタビューで訊ねられた彼女は「我慢は慣れますので……」と語るに留めたという。

——菊花賞から数日後——

「やれやれ、まさか今回の実験も成功するとはね……これはいいよ君の理論を信じるべきかな？ トレーナー君」

「ああ……『特定の感情を蓄積させてウマ娘の走りや肉体に影響を与える』……科学的根拠は無いが、フランスではこれで実績を挙げてきた」

「ははっ、机上の空論だと投げ捨てた理論をまさか実践している者がいたとはね。実に

興味深い！ それでトレーナー君、次はどんな感情を彼女に植え付けるつもりだい？」
「まだわからない……カフエがかなりご機嫌斜めだったからな。やり過ぎて蹴られるのはごめんだ——だが、実験の成功者なら他にもいる。君だ。アグネスタキオン」

「私が……かい？ 一体何を？」

「自分でもわかつているはずだ。カフエの走りに内心で感じているんだろう？ ゼクシイを」

「結婚願望はまだ無いねえ。ジエラシーというのならまあ……否定はしないよ。それが？」

「ウマ娘とは植物みたいなもんだ……水や肥料を与えればすくすくと成長し、やがて大輪の花を咲かせる」

「ふむ。それだと水はトレーニング、肥料はレースってわけか。意外にロマンチストだね、君は」

「とはいえ、水も肥料も与え方を間違えれば毒になる。少しずつ少しずつ、毒を吸収していった植物はやがて枯れてしまう」

「……」

「だが——例え枯れても根っこは残る。時間が経ち、毒が抜けければ再び芽生えようとす
るんだ『自分はこんなもんじゃない。まだ終わっちゃいない』ってな。それを注意深く、

辛抱強く見守るのもトレーナーの仕事だ」

「なるほどねえ……………ふふっ」

「どうした？ 時限爆弾で誰か吹き飛ばしたのか？」

「違うよ。何でそう思ったんだい……………まったく、ウマ娘を転がすのが上手いんだな君は。それで？ 君の下につけば、私は再び走れるということかい？」

「ああ、効果に個人差はあるが五割の確率でな。だからあくまで自己責任のもと、俺を半面的に信頼してほしい」

「いや予防線張りまくりじゃないか！ せっかくの良い話が台無しだよ！」

——その後、富澤トレーナーたちのもとに新たなウマ娘が加入する。

超光速の粒子の名を持ったウマ娘は翌年のレースで見事な復活を遂げ、その後はマンハッタンカフェと共に国内のG1レースを席卷したという。

完

「明日は聖蹄祭か。興奮してきたな」

「明日は聖蹄祭か。タイキとたづなさん、今年はハンバーガー屋やるって言ってたけど大丈夫かな？　ちよつと覗いてみるか」

「ハウデイ！　いらつしやいませ——オーウ？」

「よう、ちよつと寄つてみたんだけど」

「ソーリー、上納金ならまだ用意できてませーん」

「ヤクザかよ。別にみかじめ料取りに来たわけじゃねえよ」

「た、足りない分は私が身体で払いますので」

「話聞けよ。そもそも何も借りてねえだろが。食べにきたんだ食べに」

「わかりました。ではどうぞ、新鮮なうちに♪」

「なんで唇つき出してんだよ。いいからハンバーガー作つてくれよ」

「作つたら店じまいになつてしまいまーす」

「そんなに食べねえわ。今ちようどダイエットしてるところでさ、1個でいいんだ1個で」

「一戸デスか？」

「ハンゼルとグレーテルか。家サイズのハンバーガーとかどうやって作るんだよ」

「それもそうデスね。オーケー任せて下サーイ。トレーナーさんに最高のハンガーをお届けしマース」

「何の店だよここ。逆に気になってきたわ、ハンガー手作りしてる店とか。まあいいや、とりあえずメニューくれメニュー。ハンガーでもハンバーガーでもいいから」

「あ、メニューは携帯で見てもらう形になっているんです」

「なので、ここにあるQRコードを読み込んでくだサーイ」

「マヨネーズばっか出てきそうだなそれ。QRコードね。やってみるか——うん？」

「どうしましたか？ トレーナーさん」

「ああ、もう一回試してみるわ——おかしいな。何でマク○ナルドのメニュー表に繋がらんのだ？」

「それで合ってますヨ。同じラインナップなので」

「だからってメニューまで使い回すなよ。ただの手抜きじゃねえか」

「まあまあ。ところでご注文は決まりましたか？ 今ならスマイルが手繋ぎとハグのセットで0円ですよ」

「地下アイドルの握手会か何かか？ お金にならないし止めといた方がいいと思うよそれ。で何にするかな」

「そういえば昨日実家からフレッシュユナチーズが届きました」

「お、チーズいいね。だったらチーズバーガーにしようかな」

「なのでデイナーにピザを作って完食しました。ベリーベリー美味しかったデース」

「何で今言ったんだよ。ただの自慢話じゃねえか——じゃあこれにしとくわ、B L B (ベーコンレタスバーガー)で」

「M L B?」

「B L Bだよ。メジャーリーグじゃない、ド○ヤースを一つとか注文しねえから。てかそもそもB L Bの意味わかってんのか?」

「もちろん! ブロツコリー・レタス・ブロツコリーの略デース」

「青虫のメニューか? 肉が一つも入ってねえじゃねえか」

「確かにそうですネ……前にマックイーンがそう眩きながら食べていたので勘違いしてました」

「多分太り気味だったんだろうな……まあB L Bはもういいわ。これにするか」

「月見バーガーですか?」

「ああ。これ好きなんだよ、卵とベーコンが上手くマッチしててさあ」

「ナマコとレンコンが?」

「月どこにあるんだよそれ。月見じゃなくて月食バーガーじゃねえか……なんか不安に

なってきたからもうビッグマックにするわ」

「ビッグマックわかりました！　　そういえばBLBを食べていたマックイーンもかなりビッグなウエストだったデース」

「あんまり言つてやるなよ。　　そういやビッグマックつて美味いけどさ、大きすぎていつも口からはみだしちゃうんだよな」

「それなら良い方法がありますよ」

「え、マジで。　　ちよつと教えてもらつていいかな？」

「はい。　　まず私がビッグマックを完食します」

「完食します。　　それで？」

「あとはトレーナーさんが私を美味しく食べていただければビッグマックも食べたことに」

「ならねえよ。　　ならない。　　なんでビッグマックでそんな一命を賭すんだよ。　　ミノタウロスの皿か、藤子・F・不二雄先生のあのトラウマ漫画な」

「でしたらほみ出したところを私が反対側から食べる方向で」

「ポッキーゲームか。　　ビッグマックで試してるやつ見た事ねえな、絵面も汚そうだし――あ、そろそろできあがりそうか？　　タイキ」

「ノー、あと少し待つて下サーイ」

「わかった。でビッグマックの話に戻るけどさ、なんか受け皿みたいのがあったら良いんじゃないかな？」

「受け皿ですか……なるほど、良い考えですね」

「だろ？ それならこぼれたって問題無いしな」

「お待たせしました！ トレーナーさん」

「お、悪いな。それでタイキの意見はどうだ？ 受け皿とかあった方が良くないか？」

「そうですネ。ワーキングプアやシングルマザー・ファザーのための政策は急務だと思
いマース」

「社会の受け皿の話じゃねえよ。インテリか急に」

——10分後——

「……どうですか？ トレーナーさん」

「ああ良かったよ。ハンガーを出してこなかっただけで十分合格だったけどな」

「そうですか……だけどまだ満足はできません。一週間後に来てください、本物のハンバーガーをお届けしてあげマース」

「聖蹄祭終わってんじゃないか。学園祭レベルだったら今のままで十分だろ」

「ノー、今年は集客ナンバーワンのグループに優勝賞品が出るので、負けるわけにはいか

ないのデース」

「そんなルールできたのかよ。賞品って一体何がもらえるんだ？」

「ハイ！ トレーナーさんを一日連れ回せる権利デース！」

「俺たちの都合全く無視じゃねえか。誰だよこんなの提案したやつは」

「大丈夫ですよ。ちゃんと門限は設定しておきましたので」

「見つかんの早えな犯人。言いたいのもそこじゃねえよ」

「とにかく、こうなったからには優勝しかありマセン。絶対に勉強できない戦いがそこにあるのデース」

「『まけられない戦い』だろ。変に言い換えたからただのサボリ宣言じゃねえか……まあいいや、ウマ娘の気分アゲンのもトレーナーの役目だしな。協力するか」

「ありがとうございます。それでは気分をアゲるために明日はお出かけですね、どこに行きましょうか？」

「聖蹄祭に決まってるだろ。なに本番前に褒美受け取ろうとしてんだよ」

「トレーナーさんの協力ありがたいデース。デスガ今とはかく時間がありません。

このままではルドルフ会長のファザーギャグ100連発に果たして勝てるかどうか……」

「そこは安心していいんじゃないかなあ……けどもう材料も揃えちゃったし、今からハ

ンバーガーのクオリティを劇的に上げんのは厳しいだろ」

「確かにそうデース」

「なら明日はお出かけに切り替えということだ」

「切り替えねえよ。諦め早えな……そうじゃなくて、売り上げ伸ばしたいなら他にも方法はあるだろ？ SNSで告知するとか、宣伝動画作ってみるとかさ」

「なるホド、宣伝動画のアイデアはナツシングでシタ。では早速メイキングしまシヨウ！ たづなさんのセクシーなシーンを撮って爆釣りデース」

「気は進みませんがトレーナーさんも出演していただけるなら。マジロドーベルさんがこっそり描いている本みたいな場面を演じれば良いんでしようか？」

「指クンツで消し飛ばすやつデスね？」

「壁ドンで押し倒すやつだろ。指クンツでドラゴンボールのナツパか。てかさうじゃねえよ。釣り動画じゃなくて、ハンバーガーの魅力をアピールするんだよ」

「ウフフ、ハンバーガーなんて焼いたビーフをパンに挟むだけデース」

「言い方気をつけるよこれで一位目指すんだから。いや探せばちゃんとするだろ？ 材料へのこだわりとか、焼くまでの下ごしらえに手間暇かけてるとかさ」

「オーウなるほど……そういえばこの前ハンバーグをオーダーしたギョウシャから広報用の特典動画が届いてましタ」

「お、いいじゃん。そういうのが欲しいんだよ。ちよつと見せてもらってもいいか？」
「もちろんデース、たづなさんそのパソコンを開いてくだサーイ」
「わかりました。このファイルでいいですか？ では再生しますね」

——妥協の無い商品を作る。それが私たちのモットーです。

テキサス州の片田舎にある精肉工場に、今日もトラックに載せられた牛たちがやってきました。マイケルさん家で育てられたカウカウも、家族との最後の別れを迎えています。

『モオ〜……』

『うう……嫌だよお父さん、カウカウと離れたくないよ』

『俺だつて別れるのは辛いさ。だけどこいつは良い肉になる。妥協するわけにはいかな
いんだ』

『で、でもこいつは産まれたときからずっと一緒に』

『ええいしつこい！ もうお前には任せてられん！ 行くぞー！』

『だ、だめっ！ カウカウを連れてかないで！ カウカウーッ!!』

『モ、モオオ〜ッ!』

「——いやだめだろこれ。止めろ止めろ」

「ワッツ？　ここからが一段と涙を誘うシーンなんですヨ!?」

「サイコパスか。これ見て『いやあ美味しそうだな』なんてなるかよ。罪悪感しか覚えねえわ」

「罪悪感デスか？　確かにカロリーは多いと思いませんが」

「そつちじゃねえよ。大体ハンバーガーはカロリーゼロなのに何言ってるんだ？」

「は？」

「は？　じゃねえよ。いいか、ハンバーガーのパンは丸いだろ？　丸いってことは数字のゼロと同じ形だからカロリーはゼロなんだよ。常識だろ」

「オ、オウ……」

「ええと、その……あつ！　で、でもチーズやハンバーグは四角ですよ？」

「そうだな。だからケチャップやソースがかかってんだよ。丸いパンとパンの間にケチャップをかける。数式にしたら 0×0 だから結果0キロカロリーになるってことだ」

「ちよつと何言ってるかわかりません（セーン）」

「なんでわかんねえんだよ、いっぱい説明しただろうが——まあとにかく、この内容じゃちよつと覚えねえわ。他にも動画はあるのか？」

「ありますヨ。オススメはヒトに転生したカウカウと息子が再会する5話デース」

「もう精肉全く関係ねえなそれ。特典動画って全部そういうやつなのか？」

「ハイ、色々あつて息子と結婚した12話もオススメですよ」

「オススメならさらつとネタバレすんなよ。とにかくこれはボツだな。次に進むぞ」
「次は何をするんですか？」

「グルメ番組とかでよく見るだろ？ 作つてるところを撮影すんだよ」

「子供をですか？」

「ハンバーガーをだよ。子作りを撮影とかただの変態夫婦じゃねえか。いいからリハール始めるぞ」

「わかりマシタ。まず何をすればいいですか？ トレーナーさん！」

「まあとりあえず挨拶と、簡単な自己紹介だな。いくぞ——よい、スタート」

「ハイ皆サーン！ ワタシはトレセン学園高等部のタイキシヤトルデース。17歳デース」

「こんにちは。私はトレセン学園で秘書を務めている駿川たづなと申します。17歳です」

「ちよつと何言ってるかわかんねえ」

「ちよつと何言ってるかわかりませーん」

「何でわからないんですか？ とはいえ流石に17歳は無理がありましたね。本番では

きちんと19歳に訂正しておきますので」

「流れるようなドアインザフェイスわざと過大な要求をして断られたあとに本命の要求をすると承諾してもらいやすくなる交渉術デスね。たづなさんから鋼の意志を感じマース」

「……まあ『永遠の』ってテロップでも入れときや問題無いか。で、自己紹介が済んだら調理に移るぞ。レシピの確認はいるか？」

「あ、お願いします」

「わかった——まずはオニオンを刻んで炒める」

「タキオンさんを刻んで炒めます」

「ミルク・パン粉を加えてたつぷりのミンチと混ぜ合わせる」

「ミラ子・ファル子を加えてタツプダンスシチーと混ぜ合わせマース」

「言つてねえわ。悪魔合体のレシピか何かか？ どの邪教の館だよ」

「そこんところろしくデスね？」

「今後ともよろしくだよ。ふざけてないで真面目にやれよ……で、混ぜ終えたら後は焼くだけなんだけど、ここにもなんか見せ場が欲しいとこだな」

「ではトレーナーさんが私の背後から襲いかかって」

「逆に制圧されるんだろ。そういう方向性じゃないんだよなあ。ハンバーグの方にひと

工夫したいんだよ」

「こつそり青酸カリを混ぜるとかデスね？」

「遺産争いの真つ最中か？　アウトに決まってるんだろ。そうだな……例えばフランベとかどうだ？　酒をかけてボワツと燃え上がるやつ。結構見栄えがすると思うんだけど」

「いいと思います。インチキおじさんも登場しますし」

「ちびまる子ちゃんのOPかよ。お鍋の中から出てくんだよあれは。わかったら本番いくぞ」

——2時間後

「お待たせしまシタ。今度の今度こそは自信作デース！　早速匂いを嗅いで舐めてみて下サーイー！」

「麻薬の確認方法だろそれ。まあでも今回は確かに良い感じだな。とりあえず食レポ始めていくからカメラ回してくれ」

「わかりました、守衛さんに連絡しますね」

「誰が防犯カメラ回せつつったんだよ。そのハンディカメラに決まってるんだろ」

「わかりました。カメラ準備オーケーでース。では自己紹介からドウゾ！　トレーナーさん」

「ああわかった——皆さん初めまして、タイキシヤトルとトキノミノルのトレーナーをしている伊達といいます。いよいよ明日は聖蹄祭ということだね。二人が作ったこのハンバーガーを今から試食していききたいと思います」

「ヨロシクお願いしマース！ ちなみにトレーナーさんはハンバーガーは好きデスカ？」

「結構好きかな。この仕事って忙しいうえに結構体力も使うからさ。手軽に栄養採れるのは嬉しいよね」

「なるホド、ちなみに何のハンバーガーが好きデスカ？」

「どれも好きだけど、一番はまあビッグマックかな。あの大口でかぶりつくのがね、食べるって感じにさせてくれるからさ」

「なるホド、ちなみにビッグマックだとの具が好きデ——」

「もう早く食わせろよ！ いいよそんな深掘りしなくたって。ハンバーグ以外に回答ねえだろそれ」

「まあまあ、それよりどんな感じでレポしていくんですか？」

「ああ、最初は外見を褒めるだろ。それから中を確かめて、最後は食った感想だな」

「合コンの話ですか？」

「ハンバーガーの話だよ。確かにちよつと紛らわしかったけど」

— 数時間後 —

「いや、いいよねこれ。見た目も整ってるし、男なら思わずかぶりつきたくなるポリュームですよ」

「中もね、これまた凄くないですか？　ちよつと開いただけでこんなに肉汁が溢れ出てる。丁寧に仕込んだ証拠ですよ」

「いやもう最高に美味かったね。肉も多分喜んでじゃないかなあ。美味しく調理してくれてありがとうってね」

「——まあこんな感じだろ。ようやく完成したな」

「流石に疲れちゃいましたね。リテイクも一杯ありましたし」

「ウフフ、トレーナーさんの大根とブリの煮物にはほとほと手を焼かされました」

「大根役者ぶりって言いたかったのか？　まあそうだけどお前も大概だったろ？　食レポなのに俺の顔しか撮ってねえし。あれのおかげでもう一度ハンバーガーから作り直す羽目になったじゃねえか」

「ソーリー、オーバーアクションや変なところで吹き出すトレーナーさんが面白くて」

「うるせえな、こういうの初めてだったんだよ。まあいいや、とりあえず全部終わったし

あとはアップロードするだけだな」

「そうですね——あ、そういうえばショート動画の方をまだ作っていませんが……」

「あーすっかり忘れてたな。けど今日はこの後学園スタッフの会議があるし……どうするか」

「オフコース、ショート動画ワタシがメイキングしマース。トレーナーさんとたづなさんはワタシに感謝しながら行ってきて下サーイ」

「最後すげえ上からきたな。まあでもありがたいのは事実だし……任せてもいいか？」

「オーケーデース。さつき完成した動画を短くすればグッドなんですすよネ？」

「いいんだけどな、せっかくボツ動画が沢山あるんだからそれ使ったメイキングファイルとかはどうだ？ 香港映画のスタッフロールみたいなやつ。その方がより親近感を持つてもらえるんじゃないやねえかな？」

「なるホド、ボツ動画のダイジェストですね？ わかりマシタ。任せて下サーイ！」

——翌日昼

「おーまだ開店前なのに凄い行列だな。やつぱ宣伝動画作って正解だったな——ん？」

「あ、トレーナーさん。ずっと探してたんですよ」

「どうしたんだよたづなさん、タイキと店にいたはずだろ？」

「説明っ！ 私が急遽彼女を呼び出したのだ」

「え、理事長？ 何でこんなところに」

「うむ、詰問！ 君とたづなにこのショート動画について訊ねたかったのだ。ちよつと画面をタップしてみてほしい」

（昨日タイキに任せたやつか。何か変なものでも映ってたか？）

『……ハイ……グスツ、皆サン。ワタシは……グスツ、トレセン学園高等部の……グスツ、タイキシャトル、デース。17歳……グスツ、泣いているのは……さつき玉ねぎを切ったから、デース』

『いいよねこれ。見た目も整ってるし、ふひつ、男なら思わずかぶりつきたくなるボリウムですよ』

『こんにちは……くすん……私はトレセン学園で秘書を務めて……グスツ、駿川たづなと申します。……歳です。あ、ごめんなさい、さつきの玉ねぎが……くすん……すみません』

『中もね……ぶふつ、これ凄くないですか？ ちよつと開いただけでこんなに肉汁が溢れ出てる。丁寧に仕込んだ証拠ですよ』

Q. ハンバーガーは好きですか？

『結構好きだな。この仕事って忙しいうえに結構体力も使うからさ。手軽に栄養採れるのは嬉しいよね』

テキサス州の片田舎にある精肉工場に、今日もトラックに載せられた牛たちがやってきました。

『うう……嫌だよお父さん、離れたくないよ』

『俺だつて別れるのは辛いさ。だけどこいつは良い肉になる』

『ヒヤッハー！ いやもう最ツツ高に美味かったねえええ！』

『で、でもこいつは産まれたときからずっと一緒で』

『ええいしつこい！ もうお前には任せてられん！ 行くぞー！』

『モ、モオオッ！』

『肉も多分喜んでじゃないかなあ。美味しく調理してくれてありがとうってね』

『……』

『……』

『……ど、どうだろうか？ 少しばかり……というより、かなり誤解を与えそうな内容だと思ふのだが』

『はい……そうだと思います』

「とりあえず動画は削除して、関係箇所やSNSに釈明しておきます……」

その後、二人が対処を行ったことにより大した影響には至らなかった。だが火消しに昼過ぎまでかかったことで売上は減少。結果、僅かの差でシンボリルドルフの勝利となった。

翌日、学園のあちこちで「タイキの馬鹿はどこだああ！」と怒りを爆発させるトレーナーと「究極のハンバーガーを作りに一週間お休みするそうです」となだめる秘書の姿が見られたとか。

——数年後、フランストレセン学園、トレーナー寮にて

「——というわけで、あのときのツミホロボシをさせて下サーイ、倍返しデース！」

「なら私も、今日は土鍋でご飯を炊いちゃいますね。とりあえず5合で足りそうですか？ トレーナーさん」

「……………いや、俺いま病人なんだわ。だから——」

「ウフフ、カロリーのことなら心配無用デース。ちゃんとハンバーグは丸に整えてありマース」

「もちろん土鍋も円形なので大丈夫ですよ。ゼロカロリーですから安心です」
「だから風邪引きで食欲ねえって言ってんだろ！ もう伝染る前に帰れよお前ら！」
この後めちやくちや食べさせられた結果、風邪は治ったものの太り気味になったとか。